

令和6年度 第1回「京都市地域コミュニティ活性化推進審議会」 摘録

日 時	令和6年8月26日（月）午後6時～午後7時40分
場 所	京都市役所分庁舎地下1階 区長会室
出席委員	15名（志藤会長、前田副会長、荒川委員、岩井委員、宇野委員、尾崎委員、河合委員、玉村委員、丹治委員、中本委員、野村委員、橋本委員、森本つばさ委員、森本陽介委員、行元委員）
欠席委員	なし
傍 聴 者	1名
事 務 局	地域自治推進室：長谷川、平井、鳴海、早崎、小林、中野、清水 総合企画局総合政策室 SDGs・市民協働推進担当：荻原
議事次第	1 委員の紹介 2 会長、副会長の選出 3 これまでの取組と今後の審議会について 4 その他（事務連絡など）
会議資料	資料1 委員名簿 資料2 座席表 資料3 委員自己紹介シート【委員間の自己紹介用資料のため非公開】 資料4 京都市地域コミュニティ活性化推進条例施行規則 資料5 これまでの取組と今後の審議会について 資料6 京都市地域コミュニティ活性化ビジョン（冊子） 参考1 自治会・町内会「困ったときのヒント集」 参考2 地域活動おうえんリーフレット 参考3 安心・安全で住みやすいまちづくりって？ 参考4 自治会・町内会向けSNS「いちのいち」活用事例集

【議事内容】

1. 委員の紹介

資料3を用い、委員ごとに1分程度自己紹介。

2. 会長、副会長の選出

資料4の京都市地域コミュニティ活性化推進条例施行規則第3条第2項の規定に基づき、玉村委員の推薦により志藤委員が会長に、志藤会長の指名により前田委員が副会長に就任。

3. これまでの取組と今後の審議会について

資料5に基づき、事務局から地域コミュニティの現状と課題、これまでの取組、今後の審議会の流れ等について説明。

<主な意見>

野村委員：私が住んでいる樫原学区は西京区の中で最も人口が多く、小学生は約 880 人、中学生は約 600 人いるが、自治会離れ、高齢化、担い手不足の課題を抱えている。学区として防災に力を入れており、30~40 名集まったの勉強会も開催している。中学校 P T A 会長として勉強会の様子を見る中で、約 3,500 世帯ある学区内での連絡手段として活用できるものは何かないか考え、京都市と連携し、自治会・町内会向けの SNS 「いちのいち」を導入した。防災に関する自治連合会本部の人員は 10 名にも満たないため、小中学校等で避難所が開設される際には、各自治会の防災委員を速やかに招集する手段として「いちのいち」を活用する予定である。また、避難所の開設に加え、マンホールトイレ設置のアナウンスや、体育館に備蓄を集めたり、簡易ベッドの設置を依頼したりする際の連絡手段としても活用できると考えている。「いちのいち」を活用することで、「これなら自分にもできる」と地域の方に思ってもらい、防災チームにも加入していただきたい。将来も樫原学区に住み続けたいという人が増えることを願い取り組んでいる。

行元委員：例えば、学生が自治会に気軽に参加しやすいように、デジタル化が広がればよいのではないか。他の活動で忙しい学生にとっては、自治会活動への参加のハードルは高い。

また、デジタル化に係る取組成果を測る指標を定めることは難しいが、デジタルネイティブである学生に目を向けるだけでなく、高齢者が使って楽しいと思っているのか、自治会にどう関わってよいかわからなかった層が関わられるようになったか等も指標として検討してみてもどうか。

また、留学生への緊急時等におけるコミュニケーションは大事だと考えているので、多言語化ややさしい日本語を取り入れる等、私自身も自治会参加につながる取組について想像力を働かせながら考えていきたい。

志藤会長：京都市内の不動産業者が、ソーシャルアパートメントや国際交流関係のアパートメントを建て、住人間でのコミュニティを広げる取組を行っていると聞いている。

河合委員：取り組まれている事業者にはヒアリングをしたい。ただ、全ての事業者がそのような思いを持って活動しているわけではないので、点が線につながりにくいというところが実感としてある。

森本(陽)委員：そもそも学生は自治会に加入できることを知らないのではないか。学生も自治会に加入できることを広く発信するだけでも加入率は上がるように思う。

丹治委員：自身の地域の話にはなるが、私は学生の時に親のついでで体育振興会に加入した。

地域としてはそれが当たり前になっており、転入してきた有能な学生を地域からスカウトできていない。学生から自治会に加入したいと話があれば受け入れるが、その後十分なコミュニケーションが取れず、フォローできていないのが現状であるように思う。また、自治会はだいぶ弱っているので、少しずつ変化させていくという段階ではなく、デジタル化等大きな変化が必要な時期に来ているように思う。

先日、初めて留学生から自治会に入りたいと言われた。このような前向きな学生に加入してもらえると嬉しいが、そもそも接点がないためこちらからスカウトできない。世襲による自治会の体制は限界を迎えているように感じている。

橋本委員：街中に人のつながりを作りたいという思いから、エビバデ京ほっぷという取組を5年前から始めている。中京区役所の屋上を借りてホップを栽培しており、昨年は障がい者支援に取り組む上京区の醸造所に協力いただき、ビールを作った。5年目である今年は、京都市内30ヵ所で、高齢者事業所や障がい者事業所、企業、児童館、個人等、様々な方がホップを育ててくれており、9月には新京極商店街において皆で収穫したホップを使用したビールの販売を予定している。普段関わりのない人達がチームになって参加しているという気持ちになれるよう取り組んでいる。

岩井委員：私の地域は自治会加入率100%であり、これは自身の安心・安全のために自治会加入の必要性を感じていることによるものと考えている。災害が起きた際、市街地から遮断されてしまうため、地域としての対策が必要になる。平成30年には、台風の影響により、電柱や山の樹木が倒れ、9日間停電したこともあった。

市の周辺山間部に住んでいる人の自治会加入の目的は、自身が住んでいて楽しいというよりも、安心・安全に過ごしたいという部分が強いのではないだろうか。

志藤会長：市内は本当に広く、京北地域や北区・左京区の北部地域等、市街地と全く異なる環境もある。一方、街中は安心・安全の確保が必要といった感覚が少なく、メリット・デメリットで判断してしまうところが確かにある。環境による感覚の違いを探れば面白い議論ができるかもしれない。

尾崎委員：私の住んでいる地域には、現在多くの世帯が転入してきており、子どもも増えている。若い方には、とりあえず自治会に入ってくださいと言いたい気持ちはあるが、自治会は任意団体であり、加入も任意であるため、直接的には言えない。高齢者は体力の問題等で自治会から抜けてしまい、若い方はメリットを気にして入ってもらえない。デジタル化すればよいのかもしれないが、高齢者には難しい。

デジタル化できても、情報を見る人見ない人に分かれること、見ない人が多いことが予想され、導入にはつながらず、現在は全て紙と電話で連絡している。自治会格差は京都市内でも大きいと感じているので、審議会を通じてデジタル化について学んでいきたいと考えている。

中本委員：P T Aもなり手が少なく、加入率も下がっている。旗当番をやめた人の穴を見守り隊が埋めていたり、シルバー人材の派遣にお願いしているという話も聞く。共働きも増えて時代が変わっている中で、デジタル化は私も必須だと考えている。

また、私が所属する山科区のおやじの会では、毎年キャンプと夏祭りを開催しており、今年の7月に開催した夏祭りには、京都橘大学から約140名の学生が参加した。このような地域と学生のつながりについて、また情報を共有させていただきたい。

荒川委員：先日、社会福祉協議会の会長を長く務められている方が、家の向かいの方と顔見知りになって挨拶できる関係は安心する、としみじみ話していた。そのような安心・安全の価値を発信することが大事ではないだろうか。

北区の中川学区では、学生が地域の活動に参加してくれているが、新しい地縁、例えば学生との縁をいかにつないでいくかが今後重要になってくるように思う。かつて学生はお客さんだったが、今は学生の力も借りたくなくなってきている。学生との関係構築の必要性を感じている。

森本(つ)委員：若い人の感性は大事であると思う。実際、私は、年長者に見守られながら活動していく中で、世代による感性の違いを感じたことがある。以前、山科区の中学校で臨時講師をしたときに、生徒がタブレットを使用して勉強しており、情報に敏感に触れている姿を目の当たりにした。そういった子が育ち、地域に入ってくれば必ず力になってくれる。また、地域の長は体力があるので、若い人が長になって周りが支えるといった体制が望ましいのではないだろうか。

玉村委員：最近読んだ本に、災害ボランティアは人が直接喜ぶ姿を見ることができ、献血は誰が喜んでくれているかが見えないため、最近の若い人は献血をしないといったことが書かれており、人にとって自分がやっていることの効果に対する認知は大きな問題だと思った。単に「地域コミュニティは大事」と言うのではなく、活動にどのような価値があるのか、本当の意味で地域コミュニティが何を支えているかという効果を検証してそれを伝え、伸ばすために何が必要なのかを考えることが大事であるように思う。

宇野委員：子どもの頃の地域の大人の関わり方が、自身が大人になったときに支える側になるかに影響すると思う。未加入世帯の子どもであっても、地域として見守り、

関わりを続けることで、未加入者の意識が変わるかもしれない。これまでの自治会の在り方をそのまま継続しようとするとう無理が生じるので、今の時代に合った自治会を模索する必要がある。例えば学生が自治会に加入する場合には、これまで役員をやってきた 70～80 代の方々がこれまでのやり方を手放す勇気を持ち、時には学生に任せることが大事であると思う。

前田副会長：京都市内には様々な地域や自治会があり、すべてに共通するポイントはないように思う。資料 5 の P17 に記載されている好事例の共通ポイントには、出入り自由等、これまでの自治会の考え方とは真逆の内容もあるが、価値観を変えていかないと学生等が加入するチャンスを逃すことにもなる。地域コミュニティの活性化を考えるにあたっては、これからの自治会の在り方を考える際のポイントや言葉を増やして発信していくことが今後必要だと思う。ライフスタイルも変わってきており、組織の在り方を見直す時期にも来ているので、そういった点を中心に議論していきたい。

志藤会長：2 つの部会に分かれて議論をしていくという今後の進め方について意見等ないか。

全 員：異議なし。

志藤会長：各部会で話し合った内容を合わせながら、今後の地域の在り方を考え、場合によっては京都市政の方向性についても我々から提案しなければいけないとも思っている。是非様々な意見をいただきながら議論を深めたいと考えている。

事務局：本日は、熱心な議論をいただき、御礼申し上げます。自治会を今の時代に合わせどうアップデートしていくかがこれからの課題になると考えている。次期ビジョンを作って終わりではなく、ビジョンをきっかけにまちの在り方、自治会の在り方も変わっていくよう取組を進めてまいりたい。引き続きお力添えをお願いしたい。

次回の部会については、改めて事務局から日程調整をさせていただく。